日本軍兵士たちの軍隊観
― 1937年以降の大動員期から戦後へ―

渡　部　彬　子

日中戦争を機に1937年から開始された大動員期において，以後日本軍兵士たちはどのような軍隊観を抱いたのか。小論では兵士たちの多様な軍隊観とその変容を捉えることを目的とする。

徴兵制度下の日本人の軍隊観に関係する研究として，菊池邦作『徴兵忌避の研究』や[(1)]喜多村理子『徴兵　戦争と民衆』は[(2)]，徴兵検査を迎える人々の軍隊を忌避する意識を明らかにしている。一方，大牟羅良「軍隊は官費の人生道場？!」や[(3)]一ノ瀬俊也「『大正デモクラシー』期における兵士の意識―一兵士の手記『兵営夜話』から」[(4)]，高田里恵子『学歴・階級・軍隊』は[(5)]，軍隊経験者たちの軍隊に対する肯定的意識について言及している。だがそれら研究は必ずしも1937年以降の大動員期を対象としているわけではなく，また当時の日本軍兵士たちが抱いた軍隊観やその変容についてまでは取り挙げていない。

したがって，本論文では1937年以降に徴兵された兵士たちを対象に，彼らがどのような軍隊観を持ち，それが様々な軍隊経験の後にどう変容していったのかを考察していくことを目指す。そのためここでは，各個人の軍隊観の変容過程を見ていくことにし，入隊以前と入隊後，戦場生活経験後，および戦後に分けて兵士たちの軍隊観の変化を整理する。

1　入隊以前の軍隊観

(1) 生活改善と社会的地位向上への期待感

軍隊に対して期待感を持つ人々が農村社会に多かったというのはよく指摘される。「あそごのオンジは棄(な)げオンジ（不要な次三男）なんて言われたもんだが，軍隊で伍長になって来てス，それがら青年訓練所の指導員なんかやって，今では村会議員でがんす」というように，主に農村社会において軍隊経験は，「出世の糸口」や「貧しさからの脱却の手段」として捉えられていた[(6)]。特に一家財産を相続できる長男とは異なり，次三男らは生活の向上と社会的地位の上昇を達成するため，軍隊に強い期待感を抱く傾向にあった。だが，生活改善を志し，軍隊に期待したのは農村生活者だけではなかった。詩人の鮎川信夫は1942年に青山近衛歩兵第四聯隊留守隊に入営した際の心境を，1945年2月末の手記の中で次のように述べていた。「僕は軍隊に入るといふことは，とにかく今迄の自分の行き詰まった生活を別方向に展開せしめるといふだけでも，何かしら救ひになるに違ひないと期待してゐた」[(7)]。東京小石川生まれで，早稲田大学在学中から文筆活動をしていたという鮎川は，軍隊が彼の閉塞的生活を打破するきっかけになるのではないかと期待していた。

農村生活者や都市生活者の区別なく，生活に不満を抱えていた人々は，入隊以前，生活改善や地位上昇志向を実現させるための期待感にもとづき，軍隊観を形成する傾向にあった。

(2)「憧れ」にもとづく期待感

入隊以前に軍隊に対して期待感を抱いた人々の動機に，もう一つ，軍隊に対する「憧れ」の意識がある。大動員期は除隊後の兵士たちが故郷で戦場の話題をすることも多く，井上俊夫は青年期から中国戦線従軍経験者たちの現地での暴力行為を知っていた(8)。そして「（残虐行為という）一般人にはめったに真似のできない，ものすごい体験をしてきた先輩たちは，とても男らしくて，偉い」と考え，自身も入隊後はそこで「一人前の男」になれるのだという「憧れ」から軍隊に期待感を抱いた。また，渡辺清は，1940 年，15 歳の誕生日を迎えるとすぐに海軍に志願をした。それは「すでに小学校三, 四年生から，将来自分は必ず兵隊になろう，兵隊で一生を過ごそうと固く心に決め込んでいた」結果からであり，「わけても『スマートな海軍』（当時のぼくにはそう思えた）に強く魅かれていた」からであった(9)。内田正信も「スマートな七ッ釦に憧れ」る軍国少年で，1945 年，航空少年兵に志願した(10)。

海軍に対する「スマートな」という表現は，当時の多くの少年たちに共通する。様々な情報やイメージをもとに入隊前の多くの人々は，軍隊に対して「憧れ」を感じ，その強い期待感をもとに軍隊観を抱く傾向にあった。

(3) 生活の悩みから生じた不安感

軍隊に期待感を持つ人々がいた一方，軍隊に対して不安感を持つ人々も数多く存在した。特に一家の生計を支える者は，残された家族の生活を憂慮した。1937 年に 29 歳であった高島市良は当時こっそりと書きためていた日記の中で入隊以前の意識を次のように記述した。「（1937 年）八月二十五日（中略）すべて個人を，家を投げうって君国に奉ず。そんな事は事更言うまでもないじゃないか，と思ってもこんな時に臨んで後ろ髪を引かれる想いは人間としてどうすることも出来ない。昨年以来ずっと悪い病妻と老母，子供二人，どうするだろうと考え暗くなる」(11)。高島は入隊後，南京攻略戦に従軍し，数々の戦場体験を経て帰還した兵士であったが，入隊以前は家族の生活の不安を心配し，「暗く」なっていた。また子供が生まれた後の 1937 年に召集を受けた中西益秀も「赤紙受領」は彼の心に「重くのしかか」った(12)。中西は 1943 年 36 歳の時に戦地へ赴く事が決定した際，真っ先に「親のことが心配」で，「行きたいとは思」わなかったと回想している。

生計を支える立場にあった人々は，残していく家族の生活を憂い，特に入隊以前は軍隊に対して不安感を抱く傾向にあった。

(4) 徴兵忌避と軍隊忌避感

多くの人々が動員された 1937 年以降では，軍隊を嫌悪する情報も多く伝わり，それを受けて軍隊をいっそう忌避し，入隊に対して悲観的な意識を抱いた人々もいた。1943 年に 20 歳となり，徴兵を

逃れるため国内外を転々とした三國連太郎は，中学校在学時に受けた軍事教練の経験から「ただ，軍隊というものがいや」になり，「軍隊なんていうところに行くのは，たまらなくいやだった。絶対になじめるはずがないと思い」，「徴兵逃れ」をしたと回想している。彼は母親の通報により逮捕されたが，彼の行為は1940年代にも徴兵忌避の実態が存在していたことを示しており，彼の徴兵逃れを支えた動機も揃ってうかがうことができる(13)。だが，徴兵忌避はもっとも困難なものであり，成功した事例は稀有であった。すでに徴兵忌避者数は昭和10年までに減少しており(14)，三國の逃亡が約1年間で失敗したのは，大動員期の多大な徴兵数と兵力数をまかなうための国内監視体制が徹底されていたからであった。また，1943年に学徒兵となった高崎隆治は，入隊以前から父親を通じて「軍隊のことはよく聞いて」おり，「日本の軍隊なんか正義どころか，不義不正の見本だ」という軍隊観を抱いていた(15)。さらに岡本愛彦も「軍隊についてはいろいろ聴いて知って」おり，「二等兵で虫ケラのように死ぬのはいやだ。といって徴兵を逃げることは実際上できることではない」と感じ，1943年「どこか逃げ込むところがないかと探して」，陸軍士官学校に入学した(16)。岡本の士官学校入学は，「完全に反戦的になっていた」彼の意識に反する行為ではあったが，徴兵検査を受け，二等兵として入隊することを回避するための一策であった。

要するにこの時期は，軍隊に対する忌避感をもとに，人々が徴兵忌避を行うことはほとんど不可能であったが，その反面，徴兵された人々の中には，軍隊を嫌悪していた者も数多く存在していたというのが実情であった。

2　入隊後の軍隊観

(1) 厳格な時間秩序に対する順応と不満

多くの人々にとって入隊直後の第一印象は類似していた。日本の陸軍に期待感を抱いて入隊した井上俊夫は，入隊してすぐに『陸軍刑法』の暗誦をさせられ，「ここは娑婆の理屈や常識がちっとも通用せんところや」と感じていた(17)。井上のように，多くの人々の日記や回想録に共通していたのは，軍隊が予想以上に一般社会と異なる規則や習慣を徹底させていたことに対する驚愕と不安の意識であった。

特に人々が入隊後まず直面し，戸惑いを感じたのが，徹底された時間割生活を敷く軍隊内特有の時間秩序である。軍隊では起床，点呼，食事，訓練，勉強，就寝など一日の行動の全てが細かく時間で区切られており，初年兵たちにとってその時間割生活の徹底ぶりは大変厳しく感じられるものであった。1943年に施行された「軍隊内務令」には「常ニ時間ヲ厳守スルノ習慣ヲ養フベシ」という規定もあった。そのような生活の中で佐々木良作は「軍隊に入っては何一つとして不自由なことはない，皆時間でやるからね」と感じていた(18)。農村社会では昭和期に至っても未だ時計は「軍隊に入隊する者以外は部落の中でも特別の家の人，または勤人（つとめにん）だけが持つものと思われていた」ものであり，近代的時間秩序があまり浸透していた状況ではなかったが(19)，それでも佐々木は入隊後の兵営生活に「不自由」を感じておらず，他の農民兵士も「家の忙しさよりは遥かに楽」と述べるなど(20)，彼らは

時間秩序を徹底する軍隊生活に比較的スムーズに順応していった。

だが，それに反して軍隊内での時間秩序に不満を抱く人々も存在した。当時の軍隊生活は「監獄か，軍隊か」と呼ばれ[21]，森伊佐雄は「便所は新兵の個室なり」という揶揄を思い出しながら「自分のための時間はない」と痛感した[22]。脱走兵を探しに行く「その時ばかりは1人で行動出来るので嬉しかった」というような意識が芽生えた軍隊内での生活は[23]，入隊以前に一定の自由時間を享受していた人々にとっては堪えがたいものだった。農村出身の兵士たちも内務班における初年兵期の条件は同じであったが，彼らが育った農村社会では，そもそも私的な時間や場所を確保するといった概念が生活の中にあまり根付いていなかったようであり[24]，農村出身の兵士たちは入隊後の兵営生活において，自由な時間を欲するということも，その不足に不満を感じるということもあまりなかったようである。しかし決められた日課や慣習にもとづいて特有の時間秩序を保持し，内務班が時間秩序をより厳格に徹底させた軍隊内では，特に初年兵たちに自由なふるまいを許さず，それに不満を感じる兵士は多かった。

とはいえ，厳しい内務班生活を生き抜いていくためにはそこでの時間秩序にも順応していかなければならない。森伊佐雄が「私たち新兵にはきょうが何日で，何曜日だか，何時（いつ）だか，かいもくわからない。時間の観念がまるっきりなくなっている。（中略）地方の道徳観は軍隊では通用しない」という軍隊観を形成したように[25]，軍隊内の時間秩序をみずからに徹底させ兵営生活を過ごしていく中で，兵士たちは一般社会の時間秩序を忘却していった。兵士たちは軍隊内の時間秩序に順応するように行動しながらも，内心それに対して非常に強い不満を抱き，軍隊は自身らを「自由にさせてくれない」という軍隊観を形成したのであった。

(2) 体力的余裕と訓練への適応

軍隊内特有の時間秩序を身につけ，私的制裁を受けながら兵営生活の「内務」を続けていくのと並行して，兵士たちは身体的鍛錬を目的とした「外務」と称される軍事教練や軍事演習などの様々な野外訓練を行った。「内務」の時間秩序に不満を抱くことが少なく，比較的素直にそれらに順応していった多くの農村出身兵士たちは，「外務」の身体的訓練に対しても早い時期から適応していった。藤堂勤はその前年，兵営内で「体は百姓するよりどうだ」という父親からの便りに対し「楽です，毎日遊んでいる」と返事をしている[26]。さらに，入隊以前は農業を営み1937年29歳の時に召集を受けた高島市良は「重い軍装もさして苦にならぬ。なぁに現役くらいに負けてなるものか」と陣中日記に書いており[27]，30歳前後の兵士であっても体力的に自信のある者は身体的鍛錬を目的とした各種訓練をつらいとは感じていなかった。

一方でそうした兵士たちとは反対の意識を抱いた人々も数多く存在した。斉藤竜鳳は海軍予科練飛行科に入隊してすぐの訓練は「想像を絶したものだった。学校教練といういままでの概念とはまったく違っていた。これはもうえらいところに来た」という意識を持っていた[28]。運動神経がよく，中学卒業後，志願をして入隊した斉藤でも，その訓練の厳しさは骨身に応えたのである。また，「五尺

二寸以下の体格の貧弱な兵隊」であった朝香進一は，軍事教練を終えた後の廠舎までの早駆け訓練で，「このつらさ，死んだ方がマシだ」と感じていた[29]。身体的，体力的自信の有無にかかわらず，兵士たちにとって訓練は非常に厳しいものであり，この「死んだ方がマシ」という意識は，訓練期の兵士たちの多くからうかがうことができる。入隊後の身体的鍛錬を目的とした訓練を「厳しい」と感じた兵士たちは，その後，そうした意識をそのまま「軍隊は厳しい」といった軍隊観に転化させていくこととなった。

(3) 見直された「憧れ」と痛めつけられた心身

私的制裁という，上官からの一方的な暴力に苦しめられた多くの兵士たちは，一様にその暴力に対して抵抗感を抱いた。「スマートな海軍」に対して憧れを抱き，大きな期待感を持って入隊を果たした渡辺清は，水兵として初めて「生易し」くない軍隊内の現実に直面した。厳しい私的制裁が横行する「暴力と私刑のジャングル」に入り込んだ渡辺は，その時から「軍隊というものが，娑婆で考えていたような生易しいものではないということが，僕にもだんだんわかってきた」として彼の軍隊観には変化の兆しが表れていた[30]。同じく軍隊が「何かしらの救ひになる」と「期待してゐた」鮎川信夫も「さして理由もなく牛や馬のやうに殴打され」る内務班生活の中で「上靴や棍棒，帯革鉄拳を恐れ」，「精神的侮辱と肉体的苦痛の拷問によってへとへとに」なっていた[31]。私的制裁が蔓延する状況を前に鮎川は，「私の軍隊に対する期待は烈しく外された」と考えるに至る。入隊以前に軍隊に対して期待感を抱いていた兵士たちは，私的制裁の厳しさを経験し，少しずつ彼らの「憧れ」を打ち砕かれていった。そして，その厳しさをきっかけとして，次第に当初の軍隊観を見直すようになっていった。

もっとも私的制裁が横行し，軍隊内暴力が多くの兵士たちを苦しめた中で，時にはそれを重要視する声も存在した。「『ビンタ』が空を切ってとんできて頬に炸裂する。こう書けば軍隊は残酷のように思われるが，（中略）こうした事は強い度胸を造る精錬法で，皇軍の軍隊教育において『ビンタ』がなくなったら弱い兵隊が出来戦勝も得ることができないのではないか」というような意識も兵士たちの中には存在した[32]。「びんたをつられているうちに，寝小便の臭気も消えていった」兵士を見て副島啓治は，「時には，びんたの効用もあるのかなあ」と考え，ビンタの肯定的一側面を見出している[33]。

また1945年31歳の時にビルマ方面軍でメルギー付近の警備を担当していた青木正太郎は，初年兵教育の際に初年兵たちに一度もビンタを行わず，逆に教育期間終了後初年兵たちから「その場でビンタを貰った方がよかった」と告げられた[34]。公的で教育的なビンタは，それを被る兵士たちから理解を得られる場合，「必要悪」とも考えられたのである。

しかし多くの場合，軍隊内暴力とはその理由づけが非論理的であり，四六時中続く「意味も解らない」ビンタは多くの兵士たちにとって理不尽な私的制裁以外の何ものでもなかった[35]。彼らは「軍隊生活のきびしさを痛感」し[36]，「軍隊は社会通念の通用しない，別世界」だという軍隊観を抱くよ

うになったが[37]，そうした軍隊観は当時の多くの兵士たちにとって共通のものであった。

(4) 強調される「要領」と反発される「要領」

入隊後の兵営生活の中で軍隊的規律を身に付けていった兵士たちは，厳しい環境の中でより良く生きていくための「要領」を見出し，その重要性を強調するようになっていった。入隊前の軍隊に対する期待感を上級兵たちからの厳しい私的制裁によって突き崩されていった鮎川信夫は，「軍隊ほど要領を使はねば損な所はない」という軍隊観を持ち，「軍隊的に少しでも優秀にならう」と思い始めた[38]。また 1938 年 29 歳の時に中国山西方面で戦死した佐々木徳三郎も，家族に宛てた手紙の中で「自分は世に出てはじめて人生の生きて行く要領を知りました。（中略）実際軍隊は要領一つだ」と述べ[39]，「軍隊は要領一つ」という軍隊観に至っている。「軍隊は運隊」と呼ばれたように，兵士たちは，「運」良く，「要領」良く行動すれば認められ，進級した。階級が上がると上級兵からの「私的制裁」を避けることもできたため，「軍隊は要領一つ」は，多くの兵士たちが強調する軍隊観の一つであった。

しかし周囲の兵士たちが皆このように「要領」良く行動していたらどうか。井上俊夫は入隊後，特に「要領」良く立ち回る長谷を，「胸糞が悪くなってくる」として不愉快に思っていた[40]。「長谷のやつ，ひとりでいい子になりやがって」という井上以外の他の兵士たちの台詞も長谷が同期の中で良く思われていなかったということを示している。

つまり，「軍隊は要領」という軍隊観は，兵営内で生活する多くの兵士たちに共通のものであり，それを行使しようとする兵士たちの間で競争を生み出すものとして機能した。また，それは厳しい規律が強制され，理不尽な「私的制裁」が横行する軍隊生活から脱出するための兵士たちの階級上昇意欲と密接な関係にもあった。彼らが抱いたこの軍隊観は，兵士たちの上昇意欲を実現させるための方法を表す意識であり，その実現が阻まれるような，自分より優れた「要領」は嫌われ，反発されたのであった。

3　戦場経験後の軍隊観

(1) 戦闘経験および殺人経験後の軍隊と批判的意識

兵士たちは戦場に送られたのち，訓練中には全く経験したことがないような様々なことを経験した。兵士たちは兵力補充のため随時戦場に送られ，そこで現地部隊と合流したのだが，1938 年，上海戦の主要部隊であった富山第 35 連隊に補充兵として従軍した森田忠信は，現地軍を見た時の第一印象に「おそろしい」という意識を持った[41]。すでに戦闘を経験した部隊のメンバーは「中隊長をはじめ勇壮なもので，人殺しの経験者ばかり」，「大変な脅威感」があったというのである。自身の配属された部隊に「おそろしい」雰囲気が漂っているように見え，「びっくりした」森田は，戦場経験のはじめに日本の軍隊は「おそろしい」という意識を抱いた。また，日本軍兵士たちによる現地の民家への放火について東史郎は，「私たちは殺人鬼であり，放火魔である」という一文を日記に書き留

めた[42]。東が「私たち」と表現し，日本軍全体を「殺人鬼であり，放火魔」と捉えた意識は，実際に現地で加害行為に参加した彼の客観的視点から生じたものであり，その残虐性を最もよく知る東であったからこそ持つことのできる意識であった。

一方で加害行為に加担した多くの日本軍兵士たちの中には，悲哀の感情や疑問を持つ兵士も存在した。1937 年京都福知山第 20 聯隊に配属された北山与は，同年 9 月の上陸以来しばしば行われていた一般村落の人々に対する加害行為を批判的に捉えていた[43]。「残忍な日本の兵隊」が「二十人程」の中国人を「殺してゐる」状況を，彼の部隊が「皆んな面白そうに見に行」き始めたことについて，彼は「嫌なことである」，「かなしくてならない」と感じていた。北山は戦闘時以外での日本軍の暴力性を「恥である」と一蹴し，悲嘆の感情を抱いたのである。また，通信兵として戦場勤務に就いていた朝香進一も当時の日本軍の暴力性に対して批判的な意識を抱いていた。彼は，「（1939 年）十二月二十七日（中略）住民を愛せよと指示した処で現実には彼等の財産の強奪，破壊を日常的におこない，東洋鬼と彼等から憎悪の眼で見られているのが皇軍・日本軍ではないのか？」と，戦場における日本軍の実態を批判的に綴っている[44]。そして彼は，「物とり強盗や放火，ハレンチ行為の討伐を日常的におこなう分隊からの脱出」を図ろうと，戦場での「有線通信兵募集」に志願した。

戦場で戦闘や殺人を経験した軍隊は，時に兵士たちからも恐ろしく見えたようであるが，横暴の限りを尽くす軍隊に対し，理性的で冷静な判断力を失わなかった兵士たちは，それに疑問や反発を感じ，否定的な軍隊観を抱く傾向にあった。

(2) 上官に対する不満感

兵士たちは多くの場合，有能で部下思いの上官が自身の部隊にいることを希望したが，それは，必ず実現することではなかった。1942 年，島の飛行場の争奪を巡ってアメリカとの戦場となったガダルカナル島に衛生官として派遣された池田肇は，そこでの食糧配分の差別化を決定した上官について次のように感じていた。「十二月三日（水）今日は実に不愉快なり差別待遇（自己主義）!! 生死を誓し御互い戦友でありながら食事配分を不公平にするとは何事ぞ，之は某上官によりされた事なりこのような上官の居る軍隊は必ず負けるだろう」[45]。彼は上官によって病人と戦闘に参加していない衛生兵たち一人あたりの主食量が減らされ，その分他の兵士たちの食事が増給されたことに憤りを感じていた。池田は「患者と云えども皆一列に悪い者ばかりではない恢復期患者は健康者よりむしろ主食を多量に必要とするのであるにも係らず減量では衰弱の一途を辿るのみ」と考え，「差別待遇」を図るその上官に不満を抱き，「このような上官の居る軍隊は必ず負けるだろう」という認識を持った。ガダルカナル島では補給が絶たれ，多くの兵士たちが飢えによる戦病死の犠牲となった。池田は連日戦病死者が増えていく中で兵士たちの食事の配分量に差をつける決定は良案ではないと考え，その決定を行った上官に対し不満を顕わにしていたのである。

兵士たちが上官に対して感じた不満感は，日中戦争開始の時期から太平洋諸島での各戦闘を通じて見られるものであったが，そのような不満感は，兵士たちにとってその後の軍隊観に直接影響を与え

るものだった。

(3) 階級に基づく差別感

兵士たちの上官に対する不満感を増大させた理由の一つに，階級に応じた待遇の差があった。

元来軍隊には歴然たる階級が存在し，給与や待遇に差があった。戦闘地域によってその差は異なるが，戦闘の第一線に配備されるような下級兵士たちや下士官らは十分な補給を受けず，戦闘時における「戦死」の可能性と共に，栄養失調や医薬品の不足に起因した「戦病死」の可能性に苛まれた(46)。大村次則はそうした状況を戦場で目の当たりにし，「将校と兵隊といふものはこれ程までに差別待遇がかくぜつせられてゐるものであらうか」とその格差に驚嘆した(47)。大村は以後「全面的批判ではない」までも軍隊に対して批判的になった。

実際，軍隊内における階級の差は，兵士たちに戦死の可能性の差も突きつけた。1945 年 4 月，19 歳の時に海軍徴用船寿山丸に乗り，上海に向かっていた大塚初重は，その船が撃沈された時の体験を次のように語る。「泳いだ者は，ほとんど死にました。（中略）10 人くらいが四斗樽につかまって流れてきました。そんな数の人間がつかまるには四斗樽は小さくて，みんな片手でつかまっている様子です。そこに若い兵隊が「お願いします」と言いながら泳いできた。（中略）すると将校らしき人が「だめだ，いっぱいいっぱいだ」と怒鳴るんです。若い兵隊は素直に「ハイ」と言って，そのままブクブクと沈んでいきました。ああ，軍隊っていうのはこういうところなんだと私は思いました。そんな極限の状況でも，上官の言うことは絶対なんです」(48)。戦場では多くの兵士たちが命を落としたが，大塚が経験したように，軍隊では兵士たちが死ぬ直前まで階級の持つ威力が持続した。「軍隊っていうのはこういうところ」という軍隊観には，大村の意識と同様に，軍隊内格差を批判的に捉える視点が存在する。

とは言え，戦局が悪化し，日本が終戦を迎えると，その階級権威も凋落，消滅する。階級が存在したために兵士たちが被った差別感は大きく爆発し，士官，下士官への報復行為にも繋がった(49)。したがって「軍隊は階級次第」という軍隊観は，大動員期に徴兵された多くの下級兵士たちがそれに強い差別感を感じたために形成されたものであり，階級が存在しなければ，それは組織として全く機能しないのだという逆説をも暗示する軍隊観であった。

4　戦後の軍隊観と総括

(1) 否定的な軍隊観

1945 年 8 月 15 日に日本が終戦を迎えると，多くの日本軍兵士たちは復員し，日本へ帰還することとなった。軍隊経験，戦場経験を通して兵士たちは，戦後あらためて自身の軍隊観を再考することとなる。

入隊以前に「スマートな海軍」に憧れ，軍隊に強い期待感を持って志願した渡辺清は入隊後，軍隊の理想と現実を知った(50)。美しく思い描いていた海軍内は私的制裁極まる「暴力と私刑のジャング

ル」であり，彼はその時初めて「軍隊というものが娑婆で考えていたような生易しいものではないということ」に気付き，彼の「軍隊観はそこで変えられてしまった」という[51]。「『人間』から『兵隊』を仕立て上げるための甲板整列」に耐えきれず，そのまま海に飛び込み自殺を図る同期も多かったが，彼は「人間の姿勢」を放棄し，「兵隊」になろうと暴力に耐え続けた。戦後，渡辺は当時を振り返り，艦内で生き残るために自己の感覚を麻痺させ，命令のまま動いていた「そのことにおいて，僕らの側にも罪があった」と，反省と悔恨の念を示している[52]。渡辺の海軍での軍隊経験は，軍隊が人間的感覚を喪失させる組織であったことをその暴力性でもって彼に突きつけた。渡辺の軍隊観は，15 歳から経験した私的制裁の痛みによってあらわれたものであった。

また渡辺同様軍隊に対して憧れを持ち，入隊を心待ちにしていた井上俊夫も自身の軍隊観を明示する。「軍隊や戦争は辛いこと，苦しいことばかりではなかった。楽しいこと，面白いこともあった。だからこそ何年間も戦場生活に耐えることができたのだ。つまり戦争には「悲惨と愉楽」の二面性があったのだ」[53]。戦争の「悲惨と愉楽」は，軍隊の「悲惨と愉楽」を暗に意味している。井上は，軍隊は，組織維持のためアメと鞭を使い分ける組織であったと考える。

さらに吉田満は自身の軍隊観を次のように記す。「海軍には合理精神があったと言われている。こういう安直な断定に私は不満である。むしろそれは矛盾だらけで，矛盾をそのまま呑み込むことをよしとした世界だった。（中略）黙って矛盾の直中（ただなか）に身を投げ出す。（中略）もし合理性があったとすれば，それは矛盾をそのまま呑み込むことについて各人がそれぞれ自分の流儀で納得していたということではないか」[54]。吉田は海軍が「上下の階級原理を強調することによって逆に軍艦内の秩序を保った」非合理的な組織と結論付け[55]，それをもとに軍隊観を形成した。

多くの軍隊経験者は戦後，自身の軍隊経験をもとに戦時中に感じた軍隊内での矛盾について否定的な意識を持った。彼らの軍隊観はそれぞれの軍隊経験に裏打ちされた個人特有のものであったが，それらに共通するのは，兵士を苦しめ，人々を不幸にした軍隊への反発であった。

(2) 肯定的な軍隊観―「軍隊はいい所」を検討する

戦後，軍隊に対して反発心を抱いた軍隊経験者たちとは異なり，軍隊は「良い所」であったというような肯定的軍隊観を抱いた人々もいた。それに一つの示唆を与えてくれるのが大牟羅良の報告であり，戦後岩手の農村では「軍隊はよい所」だったと考える人々が多かったことを示している[56]。そこでは，「規律のよいとこと，特に時間にハッキリしている」，「時間にきまりがあり，食うこと，働くこと，寝ること，家の生活とは比較にならぬほどよい」，「階級の差こそあれ，家柄・職業・貧富の差は全くなく，衣食住をはじめ，すべての扱いが平等だったことが一番よかった」などという，人々の好意的な意識にもとづく軍隊観が明らかにされている。

またそのような人々の存在をもう少し詳しく数値化したものとして，高橋三郎は『共同研究 戦友会』の中で軍隊経験者の意識を探る興味深い調査を実施している[57]。そこでは，1981 年実施の「戦友会についての調査・集計」において，「あなたは軍隊生活をふりかえって今どう思われますか？」

という質問に，全体の3割以上がその体験を「楽しかった」,「どちらかといえば楽しかった」と振り返り,「あなたにとって軍隊生活は戦後の生活にどのような意義がありましたか？」という質問には，半数以上の人々が「戦後の生活に大いに役立った」と答えていた。大牟羅の報告や高橋の調査は，戦後軍隊経験を振り返り，それをプラスに考える人々が確かに存在していたということを示している。

しかし軍隊経験者が感じた「軍隊はいい所」や「軍隊生活は楽しかった」というような戦後の軍隊観は，その言葉を額面通りに受け取って考えても良いものなのであろうか。それらは「軍隊生活は戦後の生活に大いに役立った」という言葉との関係性と共に考察する必要がある。

たしかに池田武邦も戦後の人生において「杓子定規ではいかん，自分の頭で考えろと，海軍で徹底的に叩き込まれたことが役に立った」としている[58]。だが池田の言葉は軍隊生活で学んだ事の一部が戦後の生活に役立ったことを表しているに過ぎない。多くの軍隊経験者たちが軍隊生活を通して「貴重な経験」と捉えていた意識が，すなわち全面的に軍隊を肯定したものであったのかという検討は今後解明されるべき問題であり,「軍隊はよかった」と戦後回想した人々の意識の質的レベルを検討することは，戦時中の人々にとって軍隊とはどのようなものであったのかをより幅広く検討していく上で非常に重要となる。今後の研究課題としたい。

注(1) 菊池邦作『徴兵忌避の研究』立風書房，1977
(2) 喜多村理子『徴兵　戦争と民衆』吉川弘文館，1999
(3) 大牟羅良「軍隊は官費の人生道場？!」初筆 1960 大濱徹也『近代民衆の記録 8 兵士』新人物往来社，1978
(4) 一ノ瀬俊也「『大正デモクラシー』期における兵士の意識―一兵士の手記『兵営夜話』から―」軍事史学会編集『軍事史学』132 号，1998
(5) 高田里恵子『学歴・階級・軍隊』中公新書，2008
(6) 大牟羅前掲論文
(7) 鮎川信夫『鮎川信夫戦中手記』思潮社，1965
(8) 井上俊夫『はじめて人を殺す』岩波現代文庫，2005
(9) 渡辺清「少年兵における戦後史の落丁」『思想の科学』第 20 号，1960
(10) 内田正信「ぼくの予科練始末記」川崎洋『わたしは軍国少年だった』新潮社，1992
(11) 高島市良『日中戦争従軍記　従軍日記から』非売品，2001
(12) 小澤真人・NHK 取材班『赤紙―男たちはこうして戦場へ送られた』創元社，1997
(13) 梯久美子『昭和二十年夏，ぼくは兵士だった』角川書店，2009
(14) 菊池前掲書
(15) 内海愛子『ぼくらはアジアで戦争をした』梨の木舎，1986
(16) 内海前掲書
(17) 井上前掲書
(18) 岩手県農村文化懇談会『戦没農民兵士の手紙』岩波書店，1961
(19) 大牟羅前掲論文
(20) 岩手県農村文化懇談会前掲書
(21) 曽根一夫『戦史にない戦争の話 2』垣友出版，1998
(22) 森伊佐雄『昭和に生きる』平凡社，1957
(23) 「座談会記録」赤羽興三郎発言。戦時下の二宮を記録する会編『ひとしずく』第 2 号，2008

⑵④　大牟羅良『ものいわぬ農民』岩波新書，1959
⑵⑤　森伊佐雄前掲書
⑵⑥　岩手県農村文化懇談会前掲書
⑵⑦　高島市良前掲書
⑵⑧　栗田勇・斉藤竜鳳「連続対談戦後青春史」安田武『青春の記録 1 あしたの墓碑銘』三一書房，1967
⑵⑨　朝香進一前掲書
⑶⓪　渡辺清前掲書
⑶①　鮎川前掲書
⑶②　繁田良作前掲書
⑶③　副島啓治『私の陣中日記』工文社，1992
⑶④　青木正太郎「戦後 50 年，従軍の時を思い出して」戦時下の二宮を記録する会編『ひとしずく』会報誌第 2 号，2008
⑶⑤　伊藤勝『中国戦線私記』伝統と現代社，1981
⑶⑥　朝香前掲書
⑶⑦　伊藤勝前掲書
⑶⑧　鮎川前掲書
⑶⑨　岩手県農村文化懇談会前掲書
⑷⓪　井上前掲書
⑷①　小澤眞人・NHK 取材班前掲書
⑷②　東史郎『東史郎日記』熊本出版文化会館，2001
⑷③　北山与「北山日記」井口和起，木坂順一郎，下里正樹編『南京事件・京都師団関係資料集』青木書店，1989
⑷④　朝香進一「通信兵日記」，朝香前掲書
⑷⑤　池田肇『ソロモン諸島ガダルカナル島陣中日記　野戦重砲兵第四聯隊付き衛生官』私家版，出版年不詳
⑷⑥　吉田裕「アジア・太平洋戦争の戦場と兵士」『岩波講座　アジア・太平洋戦争 5』岩波書店，2006
⑷⑦　大村次則「戦争と私」「附録　大牟羅良資料」『岩手の保健』第 14 巻，2010
⑷⑧　梯前掲書
⑷⑨　福田定良「敗戦と兵隊―ハルマヘラより帰りて」久野収・神島二郎『「天皇制」論集』三一書房，1974
⑸⓪　渡辺「少年兵における戦後史の落丁」『思想の科学』第 20 号，1960
⑸①　吉田満・渡辺清「戦艦大和の士官と武蔵の兵」『私の天皇観』辺境社，1981
⑸②　渡辺清「帰還農民兵士の立場から」第五次『思想の科学』1 号，1962
⑸③　井上前掲書
⑸④　吉田満「海軍という世界」『吉田満著作集』文芸春秋，1986
⑸⑤　吉田満・渡辺清対談，渡辺清前掲書
⑸⑥　大牟羅前掲論文
⑸⑦　高橋三郎『共同研究・戦友会』田畑書店，1983
⑸⑧　梯前掲書